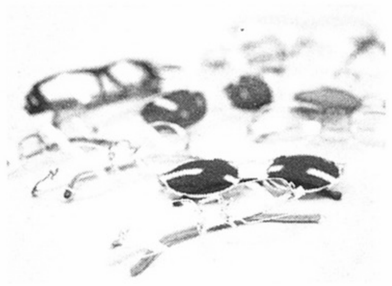
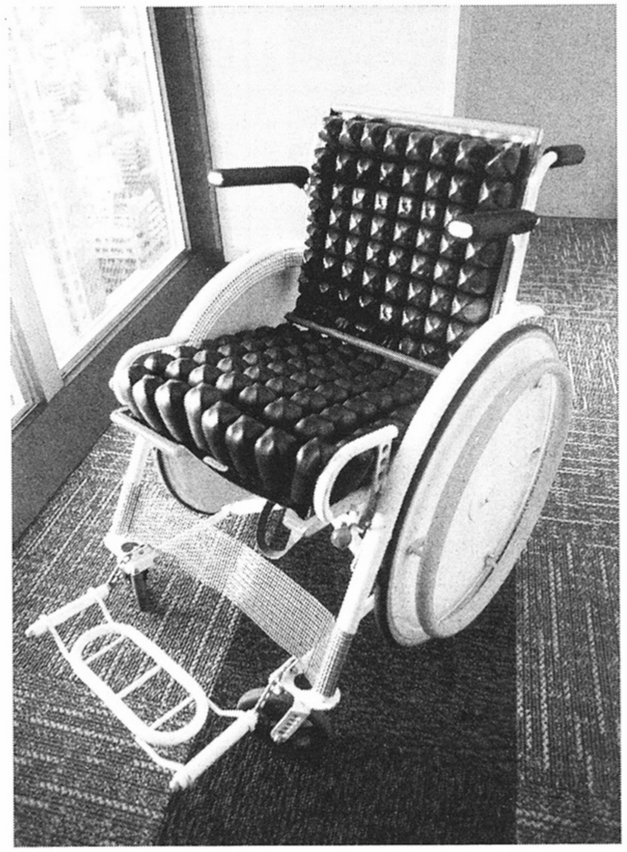
デザインディレクター
# 川崎和男さん(60)



オバマ大統領と同時に話題になった
共和党副大統領候補サラ・ペイリン。あの「メガネ」、
なんとなく記憶に残っている人も多いのでは？
「カズオ・カワサキ」は、そのデザイナーとして、
一躍、時の人となった人物。
車イス生活の自分に浴びせられたひと言から
カッコいい車イスをと――。
その使命に、ケンカごしで生きる。



# スニーカーみたいな カッコいい車イスを 創るんだ！

それはまるで羽が生えて、飛んでいきそうな――。

彼のデザインに出あうと、洗練された〝美〟に心を奪われ、そんな言葉が口をつく。こんなにも美しいモノたちに囲まれ、生活できたのなら……と、思わずウットリしてしまう。世界的にも有名なデザインディレクターである川崎和男さん(60)。彼は、米大統領選で、共和党副大統領候補となったサラ・ペイリンさんがかけていたメガネのデザイナーとして一躍、時の人になった人物だ。

〝カズオ・カワサキ〟ブランドのメガネは、フチなしタイプで、固定用のネジは全くなく、フィット感も抜群、美しくバランスのよいメガネだ。

「米国民の目は、サラ・ペイリン州知事ではなく、彼女のメガネに向けられている」と、米全国紙が、メガネを主人公に取り上げたほど。

米政界やハリウッド界にもファンが多く、愛用者にはパウエル前国務長官や女優のウーピー・ゴールドバーグら、ビッグネームが名を連ねる。

とにかく、彼が手がける美しいデザインは、「タワシから人工臓器まで」といわれるほど、身近な日用品から医療の分野まで多岐にわたる。ちなみに、川崎さんが乗っている車イスも、自らの手でデザインしたこだわりの一品なのだ。

また、その経歴も華々しく、『毎日デザイン賞』『グッドデザイン賞』をはじめ、多数の有名デザイン賞を受賞。グッドデザイン賞の審査委員長なども歴任。現在は大阪大学大学院の教授で、医学博士の称号も併せ持つ。

『デザイナーは喧嘩師であれ』をモットーにし、同名の書籍まで上梓した川崎さん。頑固で気難しいという噂も聞こえてくるのだが……。

彼は世界的権威のあるデザインディレクター。まして男性。女性週刊誌とは遠い世界の人物である。当たって砕けろで望んだ取材も、1度は断られたが、再びOKの連絡が。『週刊女性』でも何でも、出ようじゃないかってね(笑い)」

常に何かを相手に、戦っているような空気が漂うのだが……。しかし、その強烈なオリジナリティーによって生み出された品々は、驚異の進展を遂げているのも、また事実。




週刊女性　2009年3月31日号

Kazuo Kawasaki Ph.D.

人間ドキュメント

▶大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの研究室で

メガネメーカーとの仕事をスタートさせる際、彼は、奇抜なプランを提示した。「アイバンクに加入すること」、そして「盲導犬をプレゼントする財団を作ること」。「デザインとは関係ない」と怒った取締役に、川崎さんは臆することなくいった。

「そこからがデザインなんです」

理解を示さなかったそのメーカーとはすぐに訣別し、そういったことを共通認識できた今のメーカーと30年以上の付き合いになる。

## 28歳、背中が粉々で車イス生活に

福井県福井市で生まれ、同県武生市（現越前市）で育った。県内で転校を繰り返したが、どこに行っても美しい山並みが印象に残っているという。

父は、ノンキャリアから県警の部長職や署長までいった叩き上げの警察官。厳格な性格で、悪いことをすると容赦なく殴り飛ばされた。和男少年にとって最も怖い存在だった。

ケンカすると相手の兄が登場する。

「ケンカした相手の家の夕食時を狙って、竹刀片手に相手の家に上がり込み、兄弟に殴り込みをかけたんです」

そのつど、母が頭を下げた。中学校になると、殴り合いで真っ赤に染めたシャツで帰宅。父に徹底的に怒られた。

「お前は、なんで和男というかわかるか？　〝和をもって貴しとする男〟のことだ」

父のひと言がこたえた。

高校は進学校だった。読書家の父や祖父の影響で、大の読書家だった。中学生のころには、すでに将来、小説家になろうと決めていた。

東大か防衛大学しかダメだという父に、詰問された。

「〝人の生命を助けたいのか？〟と聞かれ、ハイって答えた。けれど作家には医者出身者が多かったんです。だから医学部へ行って、作家になろうと思っていました」

しかし、医学部受験に失敗。大阪で浪人生活を送るはめに。〝デザイン〟や〝イラストレーター〟という言葉に出あったのもこのころだ。

「ちょうど『平凡パンチ』という雑誌が創刊になり、華々しく出てきたのが、イラストレーターの横尾忠則さん。白い紙の上に色を塗っているだけで、仕事になってる。原稿用紙100枚書くより、こっちのほうが楽しそうだな、って（笑い）」

正月に帰郷した際、母に医学部に行きたくないと切り出した。母は、そんな息子の気持ちを察したのか、

「そうしなさい。あなたには向いていない。毎日、赤い血を見て暮らすより、赤い絵の具を見て暮らしたら」

母のひと言が、デザイナーを目指し、何度も挫折しそうな川崎さんの支えとなった。

母は、息子が弱音を吐くと、「あなたは天才だから大丈夫よ」と励まし続けた。厳格な父とやさしい母。きれいな物が好きで、スーツよりも先にブレスレットを買ってくれた。息子に、「美しいモノを作っていく仕事はとてもいいことだ」といい、いつもデザイナーへの夢を応援してくれていた。

47歳の若さでガンのため逝去した母。遺書には「あなたは、トップのデザイナーに、世界的なデザイナーになりなさい」と遺されていた。

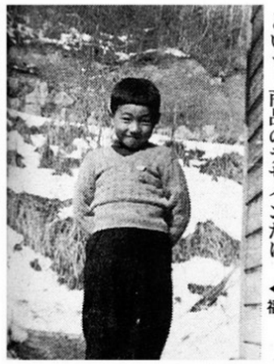
「お袋は21年間、僕を育てるためだけに生きたような人。それなのに料理が下手だとか、いつも傷つけることばかりいっていて……。いまの僕の立場なら、最高の治療をやってあげられたはずです。それが悔しくて……。しっかり仕事をしていないと、あの世で合わせる顔がないんです」

急な進路変えだったが、一浪後、金沢美術工芸大学へ。美術を専門に学んでいないため、苦労の連続だった。実技の課題ではやり直しばかり。

「デザイナーになれなくても画家になれる才能がある」

教授の言葉に励まされ、必死で勉強した。

大学卒業後、1972年に大手電気メーカー『東芝』に入社。希望した音響機器のデザインを担当。「怒られながらやりたいことをさせてもらえる、ありがたい環境だった」という。商品のデザインだけにとどまらず、企画開発、小売店でのキャンペーンに至るまで関与した。



◀美しい山並みを見て育った福井県での小学生時代

毒舌とは裏腹に、温かく、熱い思いを胸に秘めた男。そんな彼こそ、車イスを足とし、数々の挫折を乗り越えた、〝孤高のデザインディレクター・川崎和男〟なのだ――。

そんな日々が5年ほど続いた後、1978年、28歳のとき、運命の日がやってきた。

タクシーに乗っていたところを、飲酒運転の車に突っ込まれ、目の前の運転手が跳ね上がった。とっさに右側に乗っていた恋人を抱きかかえるようにかばった。幸い彼女はケガひとつしなかった。だが自分は背中が粉々に砕け散ったような痛みだけ。脊椎に損傷を負う重傷だった。

生死をさまよいながらも、生還。ある日、医者は表情を崩さずにいった。「君はこれから車イスになるのだよ」と。楽観的に「どうでもいいや」と、その現実を受け止めた。

自分のデザインを通すため、いつも食ってかかっていた上司がいた。その上司も見舞いに訪れ、2回目の訪問の際には、文庫本を置いていった。部屋を出て行く上司の後ろ姿を見つめながら、ぼんやりと考えた。

「ものすごく愛情深い人だったんですね。生意気ばっかりいっていたのに、可愛がってくれて、心配してくれて、見舞いに来てくれて……。もし逆の立場だったら自分は見舞いになんて行っていない。そう思ったときに、自分はなんてダメな人間なんだ!!　自分の傲慢さをはぎ取るために、車イスで生きなければダメなんだって思ったんです」

もし車イスでなかったら、という質問に、

「まあ、とんでもない男になってただろう、ね」

彼は、声を張った。

## 仕事が順調がゆえの苦悩で帰郷

車イス生活にも徐々に慣れた、そんなある日。

東京・銀座に出かけた時、すれ違った親子に、

「ねえ、お母さん。なんであの人、あんなのに乗っているの？」

「あなたもね、悪いことするとああなっちゃうのよ」

母は子どもを諭した。

（何てこいってんだ!!）

わざと振り返り、母親と視線を合わせた。母親はバツの悪そうな顔をして、そそくさと行ってしまった。そんな攻防がありながらもショーウインドーに映った自分の姿に愕然とした。セーターに、お仕着せの車イス。その姿は、オシャレで女性に人気のあった川崎さんを打ちのめした。

（このままではいけない!!）

一生歩けないという事実を受け入れることから始まった。

「じゃどうしようか、車イス、車イス、車イス……。と思考を突き詰めたとき、〝重くてダサい車イスなんて嫌だ。スニーカーみたいに軽くてカッコいいものを自分で創るんだ〟、それが自分に与えられた使命なんだ、と考えるようになりました」

挫折を生きる使命に変え、がむしゃらに働いた。

仕事では、1年間の入院の後、退社。フリーのデザイナーとなり、赤坂にデザイン事務所を開設。多数のスタッフとともに、次々とヒット商品を生み出した。3日でデザイン料200万円。そんな大金も入るそばから使うという、刹那的な生活が身を縮めた。

「仕事も順調で、金もある。けれども心の中では、ヒット商品にはなるけど、はたしてこのデザインは美しいのか？　このデザインで世の中は変わるのだろうか？　と悩んでいたんです」

面倒を見てくれていた恋人との別れ、仕事に対する不安などで寂しさと弱さが交錯した時期だった。精神的な負荷は、徐々に身体を蝕んでいた。医師の助言もあり、故郷へ帰ることを決意。

東京での最後の晩、眩しい夕日が頬を照らした。まるで絶望に沈むよう、夕日も闇に呑み込まれていく。

父の声が、頭の中で揺れた。

「やるだけのことはやったんだろう。帰ってこい」

（オレは東京での戦いに負けたんだ……）

とめどなく涙が流れた。

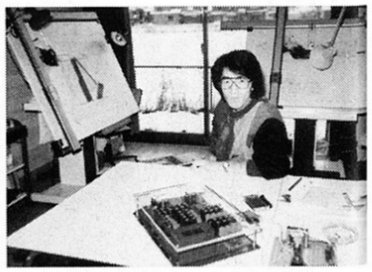
1981年、30歳を目前に福井へ帰郷。仕事はない。心配した高校時代の友人が紹介してくれたのが、〝生なめこ〟のパッケージデザイン。仕方ない、仕方ないけれど……。版下をデザインしながら涙が止まらなかった。

寝たり起きたりの生活も、故郷の美しい山並みとやさしい風に吹かれ、次第に心も身体も癒されていった。

「それまで、東京にあって福井にないものばかりを見て落胆してばかりいました。でも、あるとき〝福井にあって東京にないものを探そう〟。そう切り換えたのです。そこで出あったのが、伝統工芸だ

▲自宅でデザインの作業中の川崎さん。地方の活性化のために、今日もデザインへ魂を注ぐ

▲'90年『毎日デザイン賞』授賞式。この日、推薦者が亡くなり感涙寸前だったという



▲東京を捨て福井に戻って、いつしか「福井にあって東京にないもの」を探すように





週刊女性　2009年3月31日号

Kazuo Kawasaki Ph.D.

▶うらやましくなるほどの美人の奥様の前では、さすがのトップデザイナーも優しい顔に

ったのです」

750年の歴史を持つ『越前打刃物』。職人技に目を見張った。しかし、鎌や包丁など、刃物の伝統工芸の未来は暗かった。地元の人々も先細りを危惧し、若手後継者による研究会もできていた。

「これは東京にはないものだとピンときました。彼らは本物の腕と思想を持っているのに、東京のマーケットに届いていない。これに、自分のデザインが加われば、と意気込んだのです」

この仕事でデザイナーとしての復帰の可能性は低いかもしれない。けれども、どうしたら新しい刃物を作り上げるかだけを考え、がむしゃらに突き進んだ。

幼少時代を過ごした土地とはいえ、地元の職人の中に入ればただのよそ者にしかすぎない。

「3か月間くらい口をきいてもらえませんでした」

東京の言葉や横文字を封印し、福井弁を話した。

あるとき200枚くらい包丁のスケッチを描き、そのスケッチを壁一面に貼ると、

「僕が作りたいのはこれです。この中からどれを作りたいかいってください」

職人の1人が「どれを作れればいいんだ」と小声でいった。

「相手がとうとう口をきいた。やい、ざまあみろ!! みたいな（笑い）」

負けず嫌いの性格と、伝統工芸への熱い思いが、頑固な職人たちの心をこじ開けた。

岡田打刃物・伝統工芸士の岡田政信さん（60）は、川崎さんとの出会いを振り返る。

「最初は、〝どこの馬の骨か〟と思ってね。頑固でエゴイスト、奇人変人の類と思ったんですよ。それに、デザインって、なんだ？ コンセプト？ デザインワーク？ なんだそれ。〝そんな用語いわれたって、わかるけっ〟という感じでしたね。次第に温かみ、優しさを感じるようになってね。商売で近づいてきたのではなく、本当にこの伝統産業をよくしたいのやと。振り返ると、車イス、障害者であることが、彼の〝つらい〟〝悲しい〟〝なにくそ〟の部分なんだと思う。車イスであることは、彼のエネルギーのもとなんだね。その〝なにくそ〟に励まされ私たちもやってこれたんです。いま私たちがあるのは彼のおかげ。いまも仲間やと思っとるんです」

絆は深い。〝和男ちゃん〟と呼ぶ岡田さんの声が弾んだ。

この研究会は後に『タケフナイフビレッジ』と名づけられ、発表した包丁やナイフは、柄も金属製という工業デザインと伝統工芸がマッチした斬新なデザインで、国内外のデザイン賞を受賞した。

また「一緒に仕事をしないか？」と声をかけてきたのが、老舗メーカー『増永メガネ』の社長・増永悟さん（62）だ。

「デザインという無形財産への投資は不可欠だと考えていました。彼の怖い、難しいという人柄に〝信じられる〟と思ったんです」

このとき、ふたりとも同世代のアラフォー仲間。すぐに「2人で世界一のメガネを創ろう」と、意気投合。

川崎さんは、期間中、別に人工心臓のデザインも視野に入れており医学博士号を取っていた。解剖に立ち会うと、取り出した眼球や皮膚、神経までをも念入りに研究。最も身体に負担が少ないメガネが誕生した。

重さ10グラム以下で、部品数は従来の部品の半分である23点。MPシリーズ＝カズオカワサキデザインは、世界合計で100万本以上を売り上げた。2000年には、メガネ業界で最も栄誉のあるフランスのシルモ展サングラス部門でグランプリを獲得。思いを同じくするふたりの心が、時を経て形となり、世界の頂点に立った瞬間だった。

川崎さんは、45歳のときに心臓発作に見舞われ生死をさまよった。それを機に人工臓器のデザインを考案。医学博士号はこのときに取得した。

「身体の中にカッコ悪いステンレスの板が2枚入っている。いずれ死んだら焼かれて灰になって、その板が出てくる。イヤですね。心臓もいつか心臓移植ってなったときに、自分でデザインしたモノがあればなって思ったのです」

こんな思いをきっかけに、人工臓器への研究に傾注していった。

また、心に引っかかっていたのが、「医学部へ行く」と、だました父への思いだった。

父の葬式のとき、「親父は生涯、僕を許してくれなかった」と集まった人々へ無念さを語った。すると、

「親父さんは酒を飲んだらお前の自慢ばかりだったんだぞ!! あの身体でよくやっているって!!」

「親父は、そんなふうに思ってくれていたのか、と、その話を聞き、初めて泣いたんです」

父への思いと若くして亡くなった母への思いが交錯した。

## デザインは〝きもち〟〝いのち〟

ところで、関心のある領域について聞いた。

「地方の活性化ですね。和歌山のタワシにも本気で取り組みましたよ。82歳の社長さんに、デザインを練り上げたタワシのモデルを渡すと〝1週間預かって考えるから〟といわれたけど、冗談じゃない。タワシ業界は100円ショップなどの発展で本当に厳しいんだ。1週間延びればそれだけ時代から取り残されてしまうんだ!! と、食ってかかったりね。そう、真剣にケンカしていますよ（笑い）」

故郷の地場産業で、デザイナーとしての息を吹き返した彼らしい。そして、タワシの話の後には、デザインで世界に平和をという「PKD」（ピース・キーピング・デザイン）と銘打ったプロジェクトの意気込みを語り出した。

発展途上国でのワクチン接種に使う注射器と、災害医療で傷病者の治療優先度を識別するために使う「トリアージ」の新型タグのデザインの開発だという。

▶心臓発作で生死をさまよった、自らの経験を機に人工臓器のデザインも

「途上国へのワクチンは、日本でも善意ある人々の募金によって送り届けられています。でも、残念ながら効果が表れていない。もっとも大きな理由は〝ワクチンが腐る〟ということ。そして、〝ワクチンが腐ったとしても注射器は使える〟のが大きな問題。腐ったワクチンを捨て、空いた注射器の中身は麻薬に変わる。日本がどんなにワクチンを提供しても、目的は果たせていないというのが現状です」

そのため、開発された注射器は、縦・横8センチの紙箱に折りたたんで収納され、台紙を広げて使用するもの。使い方の手順が図解され、医師がいない地域でも、住民たちが誤らずに使える。使用後は箱に戻すと、再び取り出すことが難しい構造で、麻薬犯罪に悪用される注射器の使い回しによる感染も防げるというスグレモノなのだ。

常に死と隣り合わせで生命の重みを感じながら生きる彼だからこそ、生み出せたといっても過言ではない。

「作り手が〝きもち〟や〝いのち〟を、思いやりの〝かたち〟に変えたもの。それがデザインなのです。日用雑貨から世界平和にいたるまで、デザインには人の夢を叶える力があります。若者たちもまた、理想を貫き、デザインの役割を拡大していってくれることを願っています」

いい表情をしていた。妻の熙子さん（36）と一緒だと、表情はさらに穏やかになる。

「食べ物も人間も好き嫌いが多くてね。それで〝私はお母さんとは違うからね〟ってよくいわれるんです（苦笑い）」

熙子さんがいう。

「この人は飛行機やJR、それにお店なんかに行っても、対応が悪いとすぐにケンカしちゃうんです。きっとお母さんによって、このように形成されたんでしょうね（笑い）」

弾む会話の中で、熙子さんが教えてくれた。

「これまで障害や車イスを前面に押し出した取材を受けなかったのは、障害者がデザインしているというと、どうしてもマイナスのイメージになってしまうからなんです」

人間や職業を分け隔てたり、傲慢さで断ってきたわけではなかったのだ。

最後にひと言付け加えておく。川崎さんとかかわり合った誰も、車イスに乗っていることを気にかける人はいなかった。世の中には差別がまかり通っている。理不尽なことが許せず、まっすぐな性格は、誤解を招くことも多かった。デザインを通し、無理解と偏見を打ち破った、そんな人生だった。

「デザイナーは、自分が使いたいモノ、使ってほしいモノを創れ。デザイナーはわがままであると同時に我を通す喧嘩師でなければならない。そして、最もケンカをしなければならない相手は、自分自身でもあるのです」

大阪での夫婦の城は、32階建ての最上階。ドアを開けると広い窓から眼下に市内の街並みを経て大阪湾が広がる。六甲の山並みから明石海峡大橋までが一望でき、とても眺めがいい。部屋は、自身がデザインしたテレビや大きなスピーカーやアンプ、ガラスのテーブル、ひとり用のブランコなど、こだわりのインテリアで囲まれていた。

「ここは夕日がきれいなんですよ」

広がる景色を見つめる川崎さん。かつて、夕日を前に、絶望し流した涙がある。流した涙の分だけ、強くなり、そして、やさしくなった。

「まだまだやりたいことは山ほどあるんだ。でも、こんな身体じゃいつ死んじゃうかわかんないけどね」

隣に佇む妻の顔をチラッと見ながら、彼はイタズラっぽく笑った。

人間には、生まれ落ちたときから役割があり、すべての役割を終えたとき、身体は滅びようと、その魂は宿り続けるのではないだろうか。

彼は車イスという自らの運命を受け入れ、形あるものに〝美〟の息吹を吹き込み、デザインに世界の繁栄と平和を託した。思いのすべてを実現し、完結し、運命のすべての役割を果たした者だけに訪れる、美しい終焉――。

いつの日か、雲上で父母を見つけたのなら……。優しさをたたえた羽が生えたよう、軽やかにカッコよく、駆け寄るだろう。

そう、手がけた数々のデザイン同様、彼もまた、自らの手で生み出した〝デザイン〟のひとつなのだから――。

取材・文／藤本美郷
取　材／井上理津子
撮　影／酒井羊一

▶自宅のリビングのテーブルでは、父と母が「和男」を見守っていた――

人間ドキュメント



週刊女性　2009年3月31日号

Kazuo Kawasaki Ph.D.